

文化・交流—新しい地域創造

ロゼ

文化情報誌 ロゼ
Art information of Fuji city
 Culture Magazine ROSE
 Vol.9 AUTUMN 1994
 秋号



ロゼ

富士市文化情報誌 ロゼ 1994年10月発行(第9号)
 発行 財団法人富士市文化振興財団 〒416富士市蓼原1307番地の8 TEL(0545)60-2510代
 企画・編集・制作 財団法人富士市文化振興財団事業課広報係 ㈱エイエイピー アタゴオル

Vol. 9

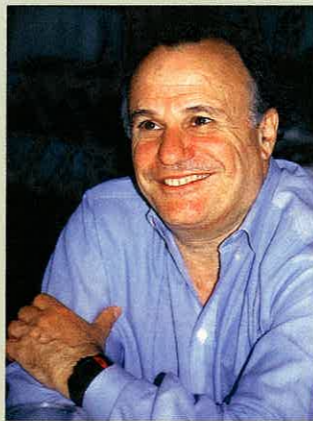
富士での日本デビューがとても楽しみです。

「九十年代はジンマンとホルティモア交響楽団の時代になるだろう」とジンマンとホルティモア交響楽団の演奏はアメリカ・メジャーオーケストラのランキングを書きかえた(今、アメリカ・ヨーロッパで話題沸騰)——ロゼシアターでは、来る十一月一日のオープン一周年記念にこのホルティモア交響楽団を招へいます。このオーケストラは初来日ですが、音楽監督のデイヴィッド・ジンマン氏とともに、今世界中の注目を集めており、日本のクラシックファンも注目しているところだ。噂の名指揮者が率いるオーケストラの日本デビューがロゼシアターという双方にとりまことに打つつけの記念公演となりました。そしてさらに錦上添花を添え、アメリカヴァイオリン界屈指の名花アン・アキコ・マイヤースをゲストに迎えます。本誌では、日本ツアーを前にしたこの世界的アーティストの二人に、ロゼだけのインタビューを試みました。

ロゼシアターオープン1周年記念 ホルティモア交響楽団 with アン・アキコ・マイヤース(Vn.)

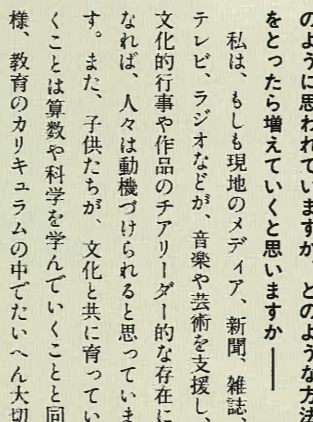


まずジンマンさんから話を伺います。最初のツアー先は富士市なんですが、日本に対する印象や抱負などをお聞かせ願えますか——
今回は、ホルティモア交響楽団の日本デビューになります。以前東京交響楽団とのツアーで、富士には行った記憶があります。富士山のふもとに素晴らしいホテルに泊まり、心温まるもてなしを受けました。特にその時コンサートで受けた印象は、訪れたお客様が演奏者に対して非常に熱狂的であり、そして尊敬の念を抱いてくれる洗練された音楽ファンであったことなどが心に残っています。私は今、自分のオーケストラを初めて日本に連れて行くことになり、そしてそのツアーの最初に富士市を訪れることに少なからず興奮しています。



あなたはホルティモア交響楽団の音楽監督に就任されてから、世界的に飛躍した訳ですが、どのような方向づけをされたのでしょうか——
私はホルティモア交響楽団の音楽監督に就任して今年で十年目になります。その間に様々な出来事がありました。それらを一ひとつ克服し、達成してきました。私たちはオーケストラのイメージを地元のみではなく広く国外まで知れ渡るよう努めてきました。いま三社のレコード会社と契約を結んでいますが、数々のエキサイティングなツアーを行

い、全米の中でも革新的な放送シリーズもつくっています。私たちはその都度新しい方法を考えながら、お客様を獲得することに専念してきましたが、これはとても披露しきれません。その中で「カジュアルなディスカバー」コンサートや「アンコモン」コンサートなどのシリーズは、魅力的で気楽な解説付きだったこともあり好評でした。私たちはまた、定期的に定評のある有望な現存の作曲家の作品を紹介してきました。いままさに、ホルティモア交響楽団のステージはアメリカ音楽の舞台として広く知れ渡ってきています。



ホルティモア交響楽団の最も特徴的なスタイルや、得意とするレパートリーのポイントを教えてください——
私たちのオーケストラは驚異的なレパートリーの広さで有名です。特にペーターヴェンのアプローチでは注目を浴びています。ペーターヴェンの付けたメトロノームの印の指示に従うことは、ワーグナーの時代から発展し

た演奏の伝統に反するのですが、「通常」のテンポよりさらに生き生きさせ、フレージングによりパンチが出てくる結果となりました。十八世紀に行われたように、管楽器のパートでは部分的に「裝飾」を施してみることがもしいましたし、多くの聴衆が私に、この歴史的な解釈がおなじみの曲に新鮮さを与えると語ってくれました。私たちは今回のレパートリーの中にペーターヴェンの交響曲第七番を入れることで日本の皆様はこの演奏スタイルを味わっていただくことにしたんです。



私、もしも現地のメディア、新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどが、音楽や芸術を支援し、文化的行事や作品のチャリティー的存在にならば、人々は動機づけられると思っています。また、子供たちが、文化と共に育っていくことは算数や科学を学んでいくことと同様、教育のカリキュラムの中でたいへん大切な事です。ホルティモアではより親しみやすいプログラムで人々に音楽を楽しんで理解してもらい、新しいファンをつくっていくことに成功しています。

噂によるとジンマンさんは蛙がお好きだという事ですが、ご説明いただけますか——
ハハハハ、まさにその通りです。私は、蛙のコレクションをしまして、色々な動物も協演していますが、一緒にツアーに出るのは今回が初めてです。とてもわくわくしています。



●デイヴィッド・ジンマン
ホルティモア交響楽団の十一代目の音楽監督として一九八五年に就任。一九八七年にホルティモア交響楽団の指揮者として初のツアーを行う。ジンマンは膨大なレパートリーの中から毎回演奏曲を選ぶことにより、コンサートシーズン中莫大な時間をその活動にあてている。そしてジンマンの国際的な評価は、グラミー賞三賞の受賞に加え、四十枚を超えるレコードの収録でさらに高まり、ヨーロッパでも引っぱりだことなり、アメリカで最も優れた指揮者の一人と絶賛されている。

●アン・アキコ・マイヤース
ヴァイオリニストの中ではトップクラスの實力を持ち、ニューヨーク、フィルハーモニック、フィラデルフィア管弦楽団、ボストン交響楽団等、世界で最も有力なオーケストラの数々と協演し、常に聴衆や評論家を最高の演奏で興奮させてきた。そして今回のホルティモア交響楽団との協演も多方面で話題となっており、その美しさと響き輝く音にますます磨きをかけ、今まで以上の最高のコンサートを聴かせるであろうと期待されている。



アメリカ
ホルティモア市と
ホルティモア響との
関係

ホルティモア市はメリーランド州州都で、アメリカ東海岸部にはニューヨークに次ぐ海老都市。古くから海上と陸上交通の要所で、鉄鋼、船舶、金属機器、食品などの諸工業が発達、また自動車、石炭などの輸入港としても栄えた。これらを背景にホルティモア市には、勤勉奮闘、自主独立、進取の気性に富んだ市民精神が育まれてきた。それは、この市が、アメリカで最初に郵便局を開き、最初に公立女子学校、職業学校を設立、また最初に電気機関車を走らせるなど多くの「全米初」のタイトル保持市であることからも明らかである。ホルティモア響はこのような市民気質を反映して、1916年、アメリカで最初の市営オーケストラとして誕生した。運営状態は決して悪くはなかったが、音楽監督が変わりながら窮地を脱し、次第に力をつけていった。ホルティモア響が脚光を浴びたのは、オーケストラをコミュニティ文化の中心として位置づけ、市民のためのオーケストラという創立時の精神に立ち返り地道に努力を重ねたからである。その起爆剤となったのは、85年にこのオーケストラに音楽監督として就任したニューヨーク生まれのデイヴィッド・ジンマンに負うところ大である。

1994.11/1.TUE ロゼシアター
大ホール
●開場/18:30 ●開演/19:00
●入場料/S:7,000円 A:6,000円 B:4,000円
学生(日席):2,000円(小・中・高)(全席指定)
●出演/ホルティモア交響楽団
指揮:デイヴィッド・ジンマン ヴァイオリン:アン・アキコ・マイヤース
●演奏曲目/ドヴォルザーク:序曲「謝肉祭」Op.92
バーバー:ヴァイオリン協奏曲Op.14
アン・アキコ・マイヤース(Vn.)
ペーターヴェン:交響曲第7番イ長調Op.92

去何回も協演していますが、一緒にツアーに出るのは今回が初めてです。とてもわくわくしています。

好きなレパートリーや今後の抱負などは——
私は様々な時代の作品を弾くことを楽しんでいます。

私はモーツァルトやバーンスタインを弾いた後では、とても新鮮に響きますし、アロコフイエフは異質な感情レベルへのチャレンジです。つまり私が言いたいことは、レパートリーの土台は偉大な宝物のような作品の数々から成り立っていて、さらにコンテンツポラリな作曲家たちは、演奏家にとつて的的なチャレンジを期待させるものなのです。新しい作品は同時に古いものを豊かにし、今の時間を創造するのです。私はいつか全く新しい作品を自分が弾くために依頼してみたいと思います。

私たちにとって、日本の心を表現できる、素晴らしいアーティストだという印象がありますが——
私は、幼い頃日本を訪れて、夏の間東京の祖母の家に滞在して以来、ずっと日本を第二のふるさとだと思ってきました。私の母は日本人なのでアメリカでも多くの日本の習慣を母より教えられました。室内で靴を脱いだり、お米をほとんど毎日食べることをとっ

でも、私はいつも日本人ですし、これからもずっとそうでしょう。

これからも日本の作品を取り上げていきますか——
私の最新のリリースは「愛の挨拶」で、ずっとアンコールとして弾いてきた私の好きなアンコール曲を集めたものです。クライスラー、エルガー、などと共に、私の親しい友人三枝章成さんが編曲した二つの曲「荒城の月」「赤トンボ」が入っています。三枝さんは、この二曲をヴァイオリンの作品として魅えらせ、日本にいたいという気持ちにさせられました。これからも編曲し、演奏していくだろう素晴らしい日本の曲は沢山あります。

ロゼシアターからは富士山が間近に見えるんですが、富士山は好きですか——
残念ながら、まだ私は富士山を見た事がありません。私はハイキングが好きなので、皆さんがコンサートに間に合うように、山から引っぱってこなくてはならないかもしれませんが、美しい富士市を訪れることを心から楽しみにしています。

どうもありがとうございました。富士市の音楽ファンも今回のプログラムにはとても期待しています。

素晴らしい響きをお聴かせ下さい。



声楽：佐野糸代琴さん(ピアノ伴奏：村上尊志)
第一部は、富士市出身の佐野糸代琴さんの声楽。前半は日本の作曲家によるもの、後半は外国曲でミュージカルからの抜粋という構成で、全曲初演のプログラム。「特に前半の日本の曲は聞いたこともなく、テープもありませんので、どう表現するか難しかったですね。静かな曲の多いプログラムなので、ドラマチックな表現を心がけました。」と苦心の程を話してくれました。



ヴァイオリン独奏：久保田巧さん(ピアノ伴奏：有森直樹)
第三部は、神秘的な魅力を感じる貴志康一の作品。「初めて演奏する曲で、楽譜をいただいた時は難しいのでビックリしました。クラシックという感じではなく、日本的な面と西洋的なものが混じり合った不思議な曲ですね。貴志さんは若くて亡くなった方だそうで、日本人だからできるニュアンスがあって、今の人なら書けない昔のモダンなハーモニーが面白いですね。ホールはとてきれいで響きも良く、弾きやすいですね。」とステキな笑顔で話してくれました。



津村禮次郎さん
(観世流能楽師・重要無形文化財保持者)
創作能「赫夜」は丸茂湛祥氏の作に津村氏が構成と曲をつけたもの。「富士市で初演の新作です。地上の人々に対する姫の情愛を表現した、ストーリー性に富んだ夢幻能で、とてもドラマチックです。もともとかぐや姫は古典能にはありません。能は演じる者が作り、各地には沢山存在しています。学者や作家の方が作るようになったのは最近ですね。」昔は大衆の楽しみであった能は、室町時代から禅の思想による貴族や武士のたしなみとなる。観世流「かぐや姫」は師である女流能楽師の草分け、津村紀三子の創作能。「このかぐや姫は、ストーリーは衆知の事として、舞と新演出で、見て楽しんでいただく様に心がけました。竹を置いたり、いろいろな照明、スモーク、月の投影などの演出は、能本来の姿からすると邪道なんです。かぐや姫伝説発祥の富士市のフェスティバルのためのアイデアで、楽しんでいただけたと思います。」かぐや姫の心情、月の神性、清らかさなど、幻想的な舞台作りは、ロゼンアターでなくては見れない能となったようです。



とうしゃめいしやう 藤舎名生さん
(邦楽家・和笛ソリスト)

6歳から父・藤舎名生より邦楽の古典技術を習得し、和笛の伝統を継承。現在は伝統を生かしつつ、全てオリジナル曲で演奏活動を続けている。和笛ソリストの創始者でもあり、ジャズメンとセッションを行うなど、ジャンルにとらわ



れぬ新しい感覚で、和笛の可能性を常に追求している。ローマ法王の前でのアドリブ演奏は、感動のあまり握手を求められたという。「富士市へ来て「かぐや姫」に關したオリジナル曲を演奏するのは2回目になります。前回の竹採り塚での曲は洋楽風でしたが、今回は説話を題材に、月に帰らなければならぬかぐや姫の感情を表現した激しい部分もあり、ドラマチックな作品になっています。」現在、京都に住む藤舎氏は「自然の中で演奏するのが一番好きですね。宇宙からの使者というか、自然の中から触発されて生まれて来る音は、とても刺激的ですね。」10月3日には息子さんとカーネギーホールで、和楽器では初のリサイタルを開くという。CDも数多く出しており、中でも「全て自然の中で録音した『月山』を聴いて下さい。自然の音もそのまま入っていて、笛と宇宙が一体化した自信作です。」と話してくれました。



ピアノ独奏：堀江真理子さん
(※7ページのHOT INTERVIEWのコーナーに登場)

かぐや姫と月

をテーマにした
名曲コンサート
9月16日(金)

能と横笛によるかぐや姫

9月18日(日)

このかぐや姫伝説「竹取物語」は、平安初期の作といわれる我が国最古の小説です。このかぐや姫にちなみ、九月十日から十八日の間、「かぐや姫フェスティバル」と名付け、オペレッタ・紙人形展・名曲コンサート・能とさまざまな催し物がロゼンアターで展開されました。本誌では各イベントに密着取材、出演者・制作者の方々からコメントをいただき、特集を組みました。これを機会に多くの市民の皆さんに富士伝承の物語を新たな視点でとらえていただくことも、富士市が誇る文化財産として、次代の発展につながればと考えております。

武蔵野音大卒の八木氏は、もともと自らオペラやミュージカルをやっていた経験を生かし、歌・振り付・演出から舞台美術までトータルにこなす方で、「行政・市民、相互の理解のもとに、さまざまな文化が地域に根づくためには労をおしませんと、このオペレッタのため東京から20回も通い続けてくれました。「子供達もよく頑張りましたし、衣裳・大道具等スタッフと周囲の方々の協力で、私の予想以上の出来上りとなりました。お客様も沢山来ていただき、とても思い出深い公演になりました。」と話してくれました。



八木瑞穂さん
(演出・台本構成/二期会)

新・竹取物語

創作オペレッタ
「お姫さまの出発」
9月10日(土)



奥山歩美さん(天帝役)
(富士市少年少女合唱団)

小学校2年から入団、在籍12年の高校3年生。明る性格で団員のリーダー的存在である。公演終了後の興奮さめやらぬ様子で、「前回(本年3月)に演じたものは、歌以外はセリフも舞台構成も半分以上変わったので、練習も一生懸命でした。進学が控えているので、勉強の方が心配でしたが、多くの方に支えてもらって舞台が成り立っていることや、いろいろな人と出会えたことがとてもうれしかった。」とメイクもそのまま話してくれました。



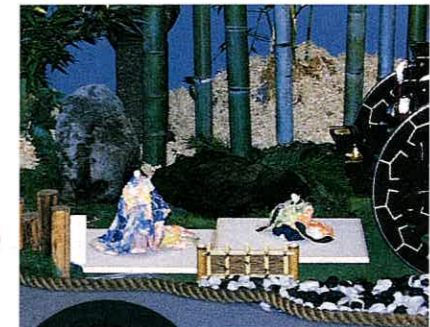
創作紙人形

「かぐや姫展」
9月14日(水)~18日(日)



田中数枝さん
(愛・紙人形富士支部代表)

「子供が手を離れてから何かに打ち込みたいと思い、長く洋裁をやっていたことと、浮世絵の美人画が好きでもあり、20年程前から紙人形を作り始め、ついには千葉の家元の所まで通い続けました。」という田中さん。「いつでも精神を自由にして、夢の世界を表現し続けたいですね。」と時代考証の勉強や縮尺率も計算し、和紙の繊細な表情を持つ人形を作り続けています。



入野多賀子さん
(紙人形創作グループ代表)

身の回りにある包装紙を丹念に揉みほぐし、独特な味わいを持つ紙人形を作る入野さん。きっかけは「自分の子供に手作りの人形を作ってあげたい」という素朴な思いから。「物語性のある人形の連作は初めてですが、メンバー相互の協力による10場面には、とても温かみが出ていると思います。これからは十二支を物語りにしたり、伊勢物語もやりたい。」と創作意欲も夢も広がっていくという。

新・竹取物語——富士に伝わるかぐや姫伝説が、さまざまな姿で甦る。

月からロゼンアターに降りた現代の「かぐや姫」たち

1854 THE "DIANA" SAILS AGAIN!
Get on Board!
 AT THE ROSÉ THEATRE
 DEC. 17th, 18th
 1994

特集：ロゼシアター・オープン一周年記念参加公演——富士市民プロデュースによるミュージカル

さあ、乗り込もう!!

市民ミュージカル「春への出発・ディアナ号の贈りもの」

今から一四〇年前、田子浦宮島村(現・富士市田子浦)で起きた郷土史実「ディアナ号事件」。
 船・海・地震・津波・嵐・大自然と闘うロシア人と郷土の人々との交流とは…史実に裏打ちされた骨太のストーリーと、国境を越えた人間愛。
 四年という長い準備期間を経て、本年十二月十七日・十八日、待ちに待ったミュージカル「ディアナ号の贈りもの」春への出発が完成、ロゼシアターで初公演です。
 この夢とロマンを乗せた初のオリジナルミュージカルは、専門家スタッフと客演の協力を得て、宮島村の人々とロシア人との純朴な交流を、一般市民一三六名の方々が熱い思いで演じます。今を生きる私たち市民が共有できる財産として、夢と希望を抱かせるオリジナル作「ディアナ号の贈りもの」。

★田子浦宮島村の人々とロシア兵との交流——史実「ディアナ号事件」の概略

日本の歴史の転換期・幕末、有名なペリールの黒船が来たのは一八五三年。その翌年一八五四年、ロシア船「ディアナ号」は日露通商和親条約の交渉中、安政の大地震による津波のため、下田港沖で舵がこわれ難破します。修理のため戸田港へ向かう途中沈没の危機に遭遇し、田子浦の宮島村まで流されました。宮島村の人々は自分たちも地震の被害を受けたにもかかわらず、また鎖国で異人たちと接するのを禁じられている中、四〇〇余名のディアナ号船員たちを助け、親身に介抱します。



▲ディアナ号の錨(富士市宮島)

ディアナ号は再び戸田へ向かう途中、嵐のために沈没してしまいましたが、その後戸田では苦勞の末、日本初の洋式帆船が建造され、一年後条約を結んだプチャーチン提督一行は、故国ロシアへ無事に帰ることができたのです。



▲ロシアから寄贈された友好の像(富士市広見公園)

ロシアの人々はこのことを忘れず、一四〇年後の一八九四年三月、富士市へ感謝と友好の絆として「プチャーチン提督と日本の漁夫像」の銅像を寄贈、市内には当時のディアナ号の錨のモニュメントなども飾られています。

★市民のプロデュースによるミュージカル化——

今を生きる市民が共有できる文化

人口二十三万人、工業出荷額静岡県第二位を誇る富士市。しかし文化面に目を転じると、ややなびりにされて来た感があります。活気ある工業都市・富士、その風土に合った文化の創造とは…それは工場のマシンの様にポリウム感と活力みなぎる芸術・文化を創ることはないでしょうか。

劇化計画の始まりは四年前、これらの現状を踏まえて現・制作実行委員長の松野さんが富士演研の鳥居さん、市民劇場の井上さんが中心となり「ディアナ号事件」に着目。市民のニーズに応えた文化の拠点「新文化会館(ロゼシアター)」建設を機に、ミュージカルを市民の手で創ることを通して、富士市の顔にふさわしい文化・芸術を育て、活気と潤いのある街づくりを目指すことになりました。

骨子を定めるべく当時の歴史的背景をさぐる学習会や数々のミーティングが行われ、専門家の賛同や協力を得て、ようやく昨年六月、市民ミュージカル「ディアナ号」制作実行委員会がスタート、実現に向けて活動が始まりました。

なぜ、市民のプロデュースによるミュージカルかといえば、それは舞台の出演・音楽の演奏・美術・大道具・衣裳からポスター・チラシ・チケット売りまで、多くの市民が得意とするジャンルで自由に参画できるところにあります。

市民が「ディアナ号」という素材を専門家と一緒に制作する中で、ひとつの作品を創る喜びを分かちあい、創り方を学び、そして身につけること、そのことは、二作目・三作目を創る大きな糧となり、五年・十年後には文字通り「ロゼシアター」で、常に市民のための市民による文化創造が花開くことにつながっていきます。



「春への出発・ディアナ号の贈りもの」あらすじ紹介

いつの時代も男は夢を追いかけ、女は、そんな男をじっと見つめているだけ…男のロマンを芯で支えているのは、母なる女の胸の中…

●幕末の宮島村●
 漁師・清吉は、ひよんなことから掛川の脱藩者・橋耕作(久米蔵)と出会う。物語はここから始まる…そして、ロシア艦船ディアナ号の遭難事件に、清吉、宮島村の若者たちは巻き込まれる。清吉を恋するお芳と女達。彼等とロシア水兵達との言葉を越えた信頼と冒険。

●舞台は宮島村から戸田へ●
 日本初の洋式帆船の建造を通して、新しい時代をつかもうとする若者たちを描きます。ダイナミズムとスピード感。乾いた叙情…
 市民ミュージカル「春への出発・ディアナ号の贈りもの」、いよいよ出航です!!

客演者紹介



スタッフ紹介

- 演出/木村光一 ●宮永雄平 ●美術/石井強司 ●照明/室伏生大
- 脚本/小松幹生 ●音響/森本義 ●振付/熊谷章 ●音楽/林哲司
- 舞台監督/中村信一 ●演出助手/若林めぐみ ●衣裳/岸井克己
- 演奏/松浦義和 富士フィルハーモニー管弦楽団, BLUE FENIX

公演日

- 12月17日(土) 18:00開演
- 12月18日(日) 13:00-18:00開演(2回公演)
- ロゼシアター・大ホール
- 料金/S席5,000円(指定席) B席3,500円
- A席4,500円(指定席) (自由席)
- 制作実行委員会事務局/☎(0545)53-9491・FAX(0545)62-1687

◀取材当日、配役発表と台本が渡された



(ロゼシアターリハーサル室)

◆ダンストレーニングはハードだ



(ロゼシアターリハーサル室)



▲基本から始めたボイストレーニング



▼下馬二五七氏よりメイクの指導



▲馴れるまでたいへんな腹式呼吸

日本とフランスには、共通の音楽感があります。

堀江真理子さんは、昨年当会館がピアノを購入する際、試弾していただいた。縁があり、九月のイベント、かぐや姫フェスティバルの中の「名曲コンサート」では、ドビュッシーとフォーレの作品を演奏していただきました。その十六日当日、リハーサル直前にもかかわらず、ロゼシアターのカフェテリアで快くインタビューに応じてくださり、ピアノの話、思い入れのある作曲家の話などを語ってくださいました。

今回は試弾していただいたヤマハではなく、スタインウェイでの演奏ですね。今迄いろいろなピアノを弾かれてきたと思いますが、楽器の違いというのは――

「それぞれに特徴があって、一台一台が違いますし、ホールの大きさや形など様々な環境にも影響されますから、まさにピアノは生きものという感じですね。弾かれる方の好みとか先入観もあるんでしょうが、一般的にスタインウェイでもニューヨーク製は明るく軽やかな音、ハンブルグ製は深みのある音といわれますし、ドイツのペーゼンドルフアーというピアノは重厚な渋い音といわれますね。良い楽器は音色の違いこそあれ、演奏者の意思により自由に歌わせることができますし、特色が引き出しやすいですね。」

私達の身の周りの道具でも、良いものは大切にしたい思いから、子供や経験の少ない人には使わせたくないという傾向がありますが、ピアノに関しては――



堀江さんはピアノをフランスで勉強され、活躍の場もフランスが中心だとお聞きしましたが、好きな作曲家や作品という――

「日本はドイツ音楽から入ったことであって、フランス音楽がもう一歩という感じで、普及度を上げたいと思っています。特に好きなフォーレ、ラベル、ドビュッシーの作品を取り上げていきたいですね。」

どちらかという、難解と思われる作曲家達ですね――

「そうですね……本来はそんなことないですが、フォーレにしても日本では『レクイエム』が代表的な曲とされていて、暗いイメージですよ。ところが彼自身は明るく、いつも希望に満ち、生きていることが大好きという人なんです。フランスの国民性は、生活を楽しむことが基本にあつて、どちらかといえば楽天的なんです。日本人はドイツ人と似たキツリとした部分と『ワビ』『サビ』のような感覚的な部分がありますね。フランス音楽はその感覚的な部分で日本人と共通する音楽感があつて、自然に入れると思えます。特にドビュッシーは東洋に憧れていて、浮世絵を持っていたり、ガムラン音楽も好きで、幻想的な間のある残響音を楽しむといった曲想が多いですね。難しいと思われているフォーレの曲は、とても美しいメロディなんです。ハーモニの付け方が驚くほど多彩すぎるからでしょうか。私にとっても大変難しい作曲家であると同時に、やはり甲斐もあるんです。歌曲の伴奏で有名なジェラルド・ムーアという人が、とても的確で面白い表現をしていて、ドビュッシーは水彩画、ラベルは油絵、フォーレは大石の彫刻のように立体的だと言っています。今日演奏するのは月をテーマにした曲だけなんです。その辺を感じていただければうれいすね。」

豊かな文化を創る作業には「心を耕す」意味が潜んでいる。

このコーナーは富士市文化振興財団の芸術委員の方に、その豊富な知識と経験による音楽・演劇・鑑賞論のエッセーをリレー形式でお願いしています。今回は文化経済学者の佐々木晃彦先生の登場です。

「ゲンキですか、金田です。」金田龍之介さんから、帝国劇場九月公演「マイ・フェア・レディ」の舞台稽古を見に来ませんか」と誘いの電話であつた。金田さんと初めてお会いしたのはパリで、当時の私はカメラメーカーの現地法人に勤務していました。蛭川幸雄演出の『王女メデア』公演で、平幹一郎さんと一緒にヨーロッパにいられた時で、ちょうど十年前のことです。金田さんとの交流から、随分多くの出会いがありました。その一つに針灸の先生を囲む会があります。

その名も「もぐさ会」という、東京・根岸の小椋庸光先生にお世話になつていて、或いはかつてなつた人達十数人がメンバーです。薬でゆっくり治療したり、休んだりできない、言わば体を張って仕事をされる人達で、尾車親方（元大関琴風）浅香山親方（元小結青葉山）など相撲界の人達や、日本ジュニア・フェザー級チャンピオンだった岩本弘行君などプロボクサー、中村玉緒さんなど女優もいます。そのうち若いお相撲さんが我が家に遊びに来るようになりまして。このような人達には共通点があります。とても明るくてイキイキしている。良く考えてみると

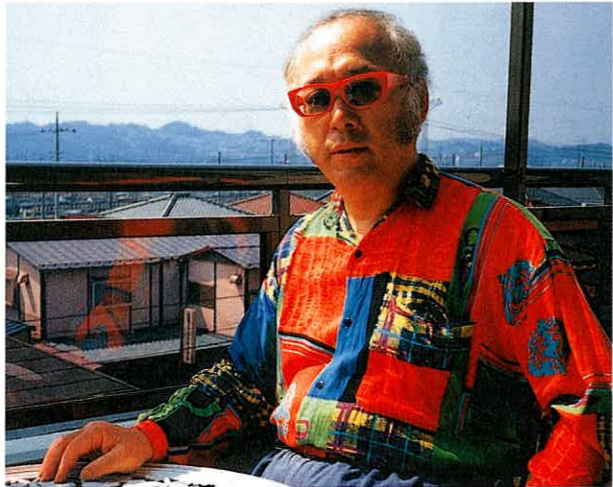
安全、安心、安定を求めているんです。この三安人間のベースにあるのは打算ですが、イキイキ人間はリスクを恐れず、『夢』を持ち、スツクと立つて辺りを輝かせる。徹底して自分の好きなことを考え、一生懸命自分に汗をかいている。そこには『求同教育』が生んだ偏差値やブランド信仰などは質感が異なる、自分らが放つ魅力があります。

地球が誕生して四十六億年。そこに一三四万種類の生物が棲み分けされていますから、私たち人間は、一三四万種類の一つに過ぎない。現在五十六億人いますから、その五十六億分の一食べ、五十六億分の一働き、楽しめば……と考えれば楽ですね。そうすれば共生社会が『狭生社会』に教育が『競育』や『狂育』になつたりしない。ポータル（国境あいま）時代です。教育は『共育』として、打てば心の奏でる『響育』であることが望ましい。自分に内的モノが育まれていけば、外的モノ（有名高校、大学、大企業、社会的ポジション）などにかかわられなくて良い筈です。現象を追う人生と、想像を育む人生では、前者は競うなかで疲労感ばかりが残り、後者は心の引き出しに、失われることのない世界がますます膨らみます。

内的モノを育む出発点は、日常生活から離れ、見知らぬ生活空間で想像を築きむことです。これが創造的世界に結び付くことを歴史は教えています。芸術、学問、ビジネス……どんな世界も一緒と思うんです。想像的作業が豊かな新しい枠組を生成してきた。そ

う考えると都市と劇的空間の関わりを論じる前に、私たち一人ひとりに劇的空間があることが望まれます。そうしたインフラ構築が、豊かな実感の原点だと思います。

「ワンパーセント・クラブ」というのが経団連にあります。経団連のワンパーセント相当額以上を自主的に寄付し、社会福祉、国際協力、環境保全、地域振興などの社会貢献活動を行うとする企業の集まりです。スポーツや芸術文化もその範疇に含まれます。でも大切なのは、私たち一人ひとりがワンパーセントの時間を芸術文化を楽しむことに使うことなんです。時間は、皆に等しく与えられた大事な資産です。「企業メセナ」も、企業の金銭的支援というより、広く芸術文化に親しむためのインフラ構築と考えたいですね。アメニティ空間は誰かが望むこと、辞書に「快適さ、喜ばしさ……」と書かれている「アメニティ」は、語源としてはラテン語の「AMARE（愛する）」に行き着きます。実はアメニティには奥深い意味があつて、縦軸に「愛」、横軸に「生命の輝き」を表し、「心」に内在するものです。ところで「AGENCI CULTURE（士を耕す）」のベースにあるのは土です。動かない土着性の高いアクリルチャーターには「CULTURE（文化）」が含まれていて、「心を耕す」意味が潜んでいる。富士山を見つめる『ロゼシアター』の位置づけ、その『ロゼシアター』と私たちの関わりが、一層鮮明になつたようです。



文化経済学者・富士市文化振興財団芸術委員

佐々木晃彦

PROFILE

ささき あきひこ/1946年山形県生まれ

明治大学、フランス国立エックスマルセイユ大学修士課程で学ぶ。

1991年より九州共立大学経済学部教授、文化経済学会理事

旧ソ連邦崩壊で最後となった「第6回日ソ円卓会議」(1988年モスクワ開催)に芸術部門日本代表の一人として参加。以降、日ソ芸術文化交流を果たす。

ミルタカメラ、セゾン・グループなど転職6回。サハラ砂漠や北極圏で生活するなど50数か国の訪問と転居34回を繰り返し、「文化の遊牧民」の異名をもつ。

3年をかけ、日本で初めて「芸術経営学」の体系を具現化。

その成果を今年9月、東海大学出版会より「芸術経営学講座」全4巻シリーズ(美術、音楽、演劇、映像の各編)として出版。

著書に「砂と海と太陽」と「企業と文化の対話」「生活文化大國への序章」「文化経済学を学ぶ人のために」「日本の自画像」「豊かき社会学」「企業文化とは何か」など多数。文化庁「科研芸術経営研究会」委員。北九州演劇祭 94顧問



ピアニスト

堀江真理子

PROFILE

ほりえ まりこ/東京生まれ

1969年、中学在学中にプラハ国際コンクール、室内楽二重奏部門第1位。

東京芸術大学付属音楽高校を経て1976年東京芸術大学在学中にフランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に入学。

79年に同音楽院ピアノ科、室内学科をそれぞれブルミエ・プリで卒業。

更に同音楽院の大学院課程を修了する。

ソリスト室内楽奏者としてフランス国内各地でリサイタルを開催、また数々の音楽祭に招かれる。

1982年に東京でデビューリサイタル。

以後バリ室内管弦楽団、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー管弦楽団など内外のオーケストラと協演。テレビ、ラジオ出演、CDのリリースなど多彩な活動を行っている。

ROSE THEATRE EVENT INFORMATION

●1994年11月～1995年1月の催し物のご案内●

財団自主事業をはじめ、一般貸出事業を含めた11月～1月のイベントスケジュールです。これを参考に、あなただけのスペシャルプログラムを作ってください。

30	27	26	25	23	22	20	19	18	17	16	15	13	12	11	10	8	6	4	3	1	日
水	日	土	金	水	火	日	土	金	木	水	火	日	土	金	木	火	日	金	木	火	日
小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール
常盤学園短期大学50周年記念行事	おれれおれ、20周年記念コンサート	第11回ふもと芸能祭	リスドポ音楽会	静岡県音楽士会演奏会	小ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール

11 NOVEMBER



●シリーズ・富士の文化活動に参加する人々◎



◀ロゼシアター・リハーサル室にて

人にはそれぞれ長い間温めている熱い思いがあり、そんな共通の思いを持った多くの人が集まり、実現に向かって努力する姿には輝きがあります。シリーズ九回目はその情熱が実り、コンサートを控えて練習に励む女性コーラス「ローゼンコール富士」の皆さんです。

ローゼンコール富士

音楽(コーラス)を通して、富士市の文化の一翼を担いたい。

九月初旬、ロゼシアターのリハーサル室から、女性独特の柔らかかな合唱が響いてきます。このサークルの名前は「ローゼンコール富士」、今年の一月結成されたばかりの初々しい女性合唱団です。名前の由来はロゼシアターと同じく、富士市民花・バラからの命名で、これからロゼを拠点に発表の場を広げていこうと取り組むを開始。中心となつていく方々のコーラス歴は四十年以上という本格的な愛好家の集まりです。年齢層は三十代から六十代と広く、ピアノの先生、他のコーラスサークルに所属している方など、皆音楽に熱い思いを抱く人達ばかりです。

現在このサークルの代表である平柳さんに活動開始のきっかけを伺いました。「戦後、現在の吉原高等学校が男女共学の時代、私達は合唱部で故岡田香積先生に指導していただきました。先生は一般合唱団の指導もしており、後の富士市マザーコーラス連絡会の共学会など、九十一才で他界されるまで各方面の音楽活動を続けられ、富士市に音楽の殿堂(文化)を作りたいという夢がありました。私達もそれ以降、いろいろなサークルに参加し、先生の教え子同志で男女混声のコーラスも結成しましたが継続できず、今年の一月ようやくこのサークルを発足することができました。もちろん若い人達の力も必要でしたし、音楽好きで、これぞというものを作りたい人なら年齢・経歴を問わず募集し、当初百三十五名の人が集まりました。」



現在は百十五名のメンバーで活動。結成間もないので、活動状況も五月の富士市コーラス連絡会フェスティバルへのゲスト出演のみですが、来年一月、ロゼシアターで結成一周年記念コンサート開催のため練習を重ねています。指導には故岡田先生の教え子でもあり、国内のみならず海外でも活躍の、東京混声合唱団コンダクター・遠藤猛先生を迎え、月一回三時間の密度の高い練習に励んでいます。限られた練習時間だけに、集中力や熱意は大変なものでなく、事前に小グループによる下準備も欠かせません。練習時ばかりでも充実し、時の経つのも忘れるくらいです。メンバーの方々は遠藤先生も「時間を感じさせない充実感も重要ですし、何よりもメンバー一人一人が向上心を持って取り組む姿勢づくりが私の

役目です。」と言います。多人数だけに運営も大変ですが、まず組織の基礎づくりをしっかりし、内容を充実させ、地域文化の向上につなげればと頑張っています。コーラスグループとして全国大会にも出られる実力をつけたい。

私たちと音楽文化を育てませんか!!

- 日時/毎月第2日曜日 PM1:00~4:00
- 場所/富士市文化会館 ロゼシアター・リハーサル室
- 参加対象/音楽好きな女性なら経験・年齢不問
- 団体費/月3,000円(遠征費及び運営費となります)
- 問い合わせ先/〒417 富士市中里1029-5 ☎0545-34-0019 平柳富士子

と役員の方々も意欲満々です。「ローゼンコール富士」の正式デビュー、一九九五年一月二十九日、ロゼシアター大ホールでの結成一周年記念コンサートに期待は高まります。詳細及びお問い合わせは右記まで――



25	24	23	22	21	20	18	17	11	9	8	4	3	2	1	日
日	土	金	木	水	火	日	土	日	金	木	日	土	金	木	日
小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール	小ホール	大ホール
ピアノ発表会(山下瑞穂)	聖書講演会	聖書講演会	小ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール	大ホール

12 DECEMBER

29	28	27	22	21	16	15	8	日
日	土	金	日	土	月	日	日	日
小ホール	大ホール	小ホール	小ホール	小ホール	小ホール	小ホール	大ホール	大ホール
ピアノ発表会(斎藤真重子)	池坊富士支部新年総会	ロゼ・チケットセンター20周年記念コンサート	フルート発表会	オペラの誘い	フルート発表会	フルート発表会	フルート発表会	フルート発表会

1 JANUARY

このイベントここが見どころ

情熱のフラメンコ

PACO DE LUCIA SEXTET

パコ・デルシア・セクステット

フラメンコギターとジャズフュージョン。当地区待望のステージ実現!!

11月25日(金) 大ホール

開場/18:30 開演/19:00

入場料/8席:5,000円 A席:4,000円 (全席指定)

チケット好評発売中!!

'95ニューイヤーコンサート

読売日響

ロゼが年頭に贈る、楽しいクラシック音楽!!

1995年1月8日(日) 大ホール

開場/19:30 開演/14:00 ※チケット好評発売中/入場料/S:5,000円 A:4,000円(学生2,000円)全席指定

指揮:尾高忠明(常任指揮者)、ヴァイオリン:藤川真弓

独唱:名古屋木実(ソプラノ)

●曲目:ベルリオーズ・序曲「ローマの謝肉祭」
メンデルスゾーン・ヴァイオリン協奏曲(ホルン)
J・シュトラウス・喜劇「こうもり」から「ボルカ」観光列車
レハール・喜劇「メリー・ワイドウ」ほか

財団自主事業

★印は、ロゼ・チケットセンター窓口でも取扱っています。

※一般貸出事業については、平成六年九月中旬までの受付分です。

※各ホールでのイベントや展示などの日程は変更になる場合があります。

チケットのお申し込み・お問い合わせは

ロゼ・チケットセンター

☎0545-60-2500

ロゼ に コー

受付時間/9:00~19:00

プレイガイド

- すみや 富士本町店 ☎(0545)63-2233
- 市役所前店東館 ☎(0545)53-5800
- 富士市民センター ☎(0545)61-8262
- ラ・ホール 富士 ☎(0545)53-4300
- チケットセンター(沼津) ☎(0559)61-2405

●カワセ書店

- 岡 富士宮・宮原店 ☎(0545)71-9592
- 富士宮・宮原店 ☎(0544)24-7180
- ユニバービスカウンター
- 吉原 富士宮店 ☎(0545)51-9027
- 丹沢 楽器富士店 ☎(0544)24-0255
- 丹沢 楽器富士店 ☎(0545)52-1586
- 吉原商店街虹のーホール ☎(0545)51-5227

富士市文化情報誌 **ロゼ**

一九九四年十月発行(第九号)

発行

財団自主事業

富士市文化振興財団

〒417 富士市中里1029-5

TEL(○五四五)六〇二二五(一〇代)

企画・編集・制作

財団自主事業

富士市文化振興財団

〒417 富士市中里1029-5

TEL(○五四五)六〇二二五(一〇代)

企画・編集・制作

財団自主事業

富士市文化振興財団

〒417 富士市中里1029-5

TEL(○五四五)六〇二二五(一〇代)

企画・編集・制作

【編集後記】

昔から朝の来ない夜はないと言われるが、さしも猛威をふるった酷暑もようやくおさまり、木々の緑は確実に色づいた。虫の音の合唱を聴き、自然の摂理にホッと秋から冬になるこの時期、弦楽器の音色が妙に似合う。今号の表紙にはモチーフにヴィオラを使ってみた。先日、富士フィルのヴィオラ奏者Oさんの愛器を拝借して秋の感じを演出、楽器シリーズ秋号が完成した。来る十一月一日は開館一周年、その記念公演にホルティモア響とD・ジマソン氏を招く、このメディアにもならない本誌だけのインタビュー、世界のマエストロの来演が待たれる。今回は地元富士市の文化情報も満載、秋の夜長の座右の友にどうぞ。